

筒井順慶
わが良き狼

ウルフ



筒井康隆全集 6

筒井順慶
わが良き^{ウルフ}狼

新潮社

つづいじんけい
筒井順慶・わが良き狼^{よ ウルフ}

筒井康隆全集 第6巻

昭和五十八年 九月二十日 印刷
昭和五十八年 九月二十五日 発行

定価一五〇〇円

著者 筒井康隆

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一(千一六二)

電話 業務部 東京(〇三)二六六一五一一

編集部 東京(〇三)二六六一五四一一

振替 東京 四一八〇八番

印刷 大日本印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小
社通信係宛御送付下さい。送料小
社負担にてお取替えいたします。

© Yasutaka Tsutsui 1983 Printed in Japan

ISBN4-10-644406-2 C0393

筒井康隆全集第六卷・目次

長 篇

筒井順慶……………

7

短 篇

君発ちて後……………85

最終兵器の漂流……………102

色眼鏡の狂詩曲……………107

ふたりの印度人……………121

懲戒の部屋……………125

アフリカの血……………137

美 女……………149

いずこも愛は……………150

落語・伝票あらそい……………153

マイ・ホーム……………156

亭主調理法……………159

時の女神……………162

あらえっさっさ……………165

九十年安保の全学連……………180

地獄図日本海因果……………183

わが愛の税務署……………201

カ ラ ス……………216

接 着 剤……………219

解 説

初 夢……………	364	エッセイ	
視聴覚時代の学生運動……………	359		
小説「私小説」……………	259		
雨乞い小町……………	243		
ヒッピ―……………	240		
わが家の戦士……………	225		
酔いどれの帰宅……………	223		
狸……………	222		

宇 波 彰

地下鉄の笑い……………	269		
晋 金 太 郎……………	272		
竹 取 物 語……………	301		
夜の政治と経済……………	304		
新 宿 祭……………	320		
わが良き狼 ^{ウルフ} ……………	335		
“演劇青年”の自戒……………	365		

筒井順慶・わが良き狼^{ウルフ}

装
幀

山
藤
章
二

長篇
筒井順慶

ゲシュタルト崩壊

作者自身が、自分の作品の中に主役として登場し、演技を始めるというのは、いいことなのか、悪いことなのか。

ある評論家にいわせれば、それは、作者がマンネリから脱け出そうと苦しんだ末、ついに自ら小説の中へいちゃいちゃり出て、自分はこれだけ苦しんでいるのですということを読者に知ってもらうため、けんめいにのたうちまわっている姿なのだそうである。

とすると、日本の私小説作家はほとんど、マンネリから脱け出そうとするポーズのままでマンネリになってしまったということだろうか。

まあ、そんなややこしいことはどうでもいい。

この小説にも作者自身が登場するが、それは物語の都合上しかたのないことなのだというのを、まず知っておいていただきたい。

どんな都合なのかということは、この話を読み進むにしたがつてわかっていただける筈だ。

とにかく作者はまだ三十三歳の若さであって、マンネリ

になろうにもなりようがないし、作家としては名もそれほど売れていないし、健康だし好男子だし、それはこの場合あまり関係はないが、結局そういうわけで、作者自身が出演することには、おれはあまりやましさを感じていないのである。

と、自分を納得させた上で、ある日おれは家の近所の喫茶店で、ひとりの女性を待っていた。

この店は大きなガラス・ウインドウで青山通りに面している。だから店内は明るい。最近できたばかりの新しい店だ。おれはいつもこの店で友人と会い、編集者とうちあわせをやる。今日やってくる女性は友人ではなく、編集者の方である。お互いに友人になりたい気持は充分あるのだが、お互いの職業意識がそうさせてくれない。

約束の時間を十分ほど過ぎた時、藤田電子はやってきた。おかしな名前だが、父親が電子工学の博士なので、こういう名前をつけられてしまったそうだ。まだ二十五歳の彼女は、明るい色彩のミニをはいていた。

「お待たせしちゃって」電子は息をはずませながら、おれの正面の椅子に腰をおろした。

「すごい色だな」おれは眼をしばたいた。

ウエイトレスにコーヒーを注文するなり、電子はおれに向きなおって原稿の催促をはじめた。「この前は、あと百枚ほどだっっていつたわね。もう出来たでしょ」

「まだだ」おれは彼女の恰好のいい唇からあわてて眼をそらし、あらぬ方を睨みつけた。「書き直しばかりしているんでね」

「うそよ」彼女は何かも知っているという様子でうなずいた。「それはうそよ」

「なぜだい」おれは、やっと笑うことができた。「なぜ、そう思う」

「あなたがあの長篇を書き出したのは二年前」と、電子は朗読調でなめらかに喋り出した。「そのころ、あなたは売れない作家だったわ。だからその長篇も、出版してもらってはいなかった。そうでしょ」

「よく知ってるね。その通りだよ」

「そんなある日、あなたは修文社の倉橋さんと会い、その長篇のことを話した。倉橋さんは気乗り薄に、完成したら見せてくれといった」

「いや。それはちがう」おれはコーヒーにむせながらかぶりを振った。「そうじゃない」

「まあ、しまいまでお聞きなさい」彼女は面白そうにおれを見ながら喋り続けた。「その後あなたの名前はだんだん売れてきた。そしてある日、長篇を頼みにきた八木書房の藤田電子と会った。藤田電子があまりに美人なので、あなたはたちまちその色香に迷い、倉橋さんとの約束を都合よく忘れてしまった」

「ひどいうぬぼれだ」おれはあきれかえって、彼女の額のニキビを茫然と眺めた。「ナルチシズムの極致だ」

「書きかけの長篇が完成すれば八木書房で出そうとわたしに約束した直後、倉橋さんから催促があった。あなたのなま返事で倉橋さんはかえって躍起になり、やいのやいのとせかしはじめた。さてさてどっちへ渡すべきか。あっちへ渡せばこっちが立たず、こっちへ渡せばあっちが立たず、義理と人情の板ばさみ、とつくに完成した原稿をかかえて、あなたは今おろおろしながらひとりで悩んでるんですよ」

「いつに喋り終り、彼女はコーヒーをブラックでぐいと飲みほした。」

「そこまで知っていないながら」おれは嘆息した。「なぜそんなにおれをいじめるんだ」

「はつきりいったげるわ。わたしは是が非でもあなたの原稿を取ってこいと部長から命令されてるわけでも、なんでもないの。出さなきゃいけない本は他にいっぱいあるし、だいいちあなたの本なんか出したって、せいぜい売れて七千部。いくら名が売れだしたといったって、まだまだ新人なんですよのね、あなたなんか」

「それならどうして」

「意地よ。意地なのよ。編集者の意地でもあり女の意地でもあり。とにかく倉橋さんなんかに負けたくないの」

「おれは意地の犠牲か」

「そうよ」笑った。「あなたはまだまだ苦しむのよ」

ウエイトレスがカウンターからおれの名を呼んだ。「お電話です」

電話は修文社編集部の倉橋栄一からだった。

「やっぱりそこにいたな」と、彼はいった。「これからあなたの家へ行く」

低い声だった。いつものように唇の端を歪めて牙を剥き出し、鋭い眼をぎらぎら光らせて喋っているにちがいない。

「例の話だが、今日こそぎりぎり決着をつけてもらうぜ」

「な、なんの決着です」おれはとぼけた。膝ひざががくがくした。

「しらを切るんじゃないやねえ」彼は凄すごんだ。「あなたが例の長篇を八木書房に売ろうとしてるって情報じほうがちゃんと入ってるんだ」

「デマですなそれは」

「そうだといいがね。あなたの為にもな。ところがこっちのは信頼すべき情報なんだ。もしそれが本当なら、おれが今まであなたの家に運んだ足はすべて無駄足ということになるから、そのオトシマエをつけてもらわなきゃならねえ」

「そんなことはありませんから、どうぞご心配なく」

おれは笑おうとしたが、今度は笑えなかった。

「倉橋さんからだったんでしょ」受話器を置いてテーブル

に戻ると、電子が頬に嘲笑のようなものを浮かべてそういった。「あなたの顔色でわかるわ」

おれは返事をしなかった。いやな予感がしていた。このもめごとがもつとながく尾を引き、おれの立場がもつと悪くなりそうな予感だ。いつもなら電子と軽口をとばしあい、時には口説いたり口説かれたりして遊ぶのだが、今日はそんなことをする気にもなれず、おれはすぐに立ちあがった。「アパートへ帰る。また会おう」

店の前で別れる時、電子はじろりとおれを斜めに見あげていった。「あなた、まさか、わたしと倉橋さんの板ばさみになつてるといふ立場を楽しんでるんじゃないでしょうね」

「気をまわすなよ」おれは、つぶやくようにいった。「まわしすぎだよ」

電子の拾ったタクシーが代々木の方へ走り去ってしまうまで見送ってから、おれはのろのろと青山通りを南へ歩き出した。風はなま温かく、陽ざしは強かった。

編集者は資本家に属するのかな——歩きながら、おれはそう考えた。

出版は情報産業だ。しかし現在は、印刷という近代的生産手段を編集者が握っている一方で、限られた数の小説家が中世的な家内手工業的技術により原稿の升目填塞作業をやっている。そこには労働基準法や最低賃金法による保護

も及んでいない。マニファクチュアだ。これはあきらかに現代的ではない。ではどうすればよいか。

答えはただひとつ。レジャーを利用してみんなが小説を書けばいいのだ。日本人は権威主義的だから、プロの方がアマよりえらいと思っていて、したり顔で「さすがはプロだ」などといつてうなずくのが好きだ。だが今やプロとアマの力量の差など、少くとも大衆文化の世界ではないも同然ではないか。今の流行作家が書いているような小説なら、だれにだって書ける。

そんなことを考え続けながらアパートまで帰つてくると、おれの部屋の前の廊下に、でかいクラフトの封筒を持った若い男が立っていた。

おれの姿を見て、彼はあわててドアから遠ざかり、廊下の少しはなれた場所に佇んでおれを眺め続けた。おれがポケットから鍵を出し、ドアをがちゃがちゃやっているとき、彼はふたたび、ゆっくりとこちらへ近づいてきた。

「あのう」おどおどしていた。「ご主人ですか」

「そうだよ」

「そうですか」名刺を出した。「じつは私、ヒヨタのセールスマンなのです」

「ヒヨタって、車のかい」

「ミレニアム四〇〇〇、バロネスサ一五〇〇のヒヨタでございます」

「ぼくは、車を運転しないことにしているんだ」

「ほとんどの方は、そうおっしゃいます」彼はつつしみ深げに笑った。「駐車する場所が少いからかえって不便だ。タクシーの方が安あがりだ。都内の道路はすごい混雑だから、電車の方が早い。そうおっしゃるのでございましょう」

「いや。そんなことじゃない」

「ははあ。すると運転免許をとるのが面倒だとおっしゃるんですね。それでしたら」彼は自分の靴を見おろし、さりげなく小声でいった。「車を買っていただけるのなら、免許証の方はなんとかしますよ」

おれはびっくりした。「そんなこと、できるのかい」

「しつ。声が高うございます」彼は周囲を見まわした。「立ち話もなんでございますから、ちよつとお邪魔させていただけませんか」だんだん厚かましくなつてきて、彼はおれに身をすり寄せてきた。「お部屋でカタログをお見せした上、よくご説明申しあげます」

おれはしぶしぶドアをあけ、彼を部屋に入れた。

「ははあ。これはまあ、いいお部屋で」彼はリビング・ルームのソファに腰をおろしながらいった。「こういうお住まいなら、ますます車をお買いにならなくちゃ」

「関係ないだらう」

「ございます」彼はうなずいた。「車は住生活のパロメー

ターであるとマクルーハンも申しております」

「マクルーハンがそんなこと言ったかい」

彼は咳せきばらいしながら、クラフトの封筒からカタログを出した。「これがあなたさまにおすすめしたい新車、セブター二〇〇〇Sでございます」

カタログの表紙は猥褻わいせつなサモン・ピンクに塗り立てたスポーツカー・タイプの乗用車だった。

「三角窓がないな」と、おれはいった。

「それは最新の流行でございます」彼はべらべらと喋り出した。「そしてエンジンはOHCつまりオーバー・ヘッド・カム。これも最新の流行でございます。こちらをご覧ください。デザインも最新型のスペースシップ・ライン。これをご覧ください。片利きしないディスク・ブレーキです。シフトレバーは前進五段ミッション、そして、ああ、こちらをご覧ください。乗り心地のよい四輪独立懸架になつておりまして震動を伝えません。そしてこの車は、おどろくなかれ百五十馬力です」

「ちつともおどろかない」と、おれはいった。「車のことには知らないんだ」

彼はあきらかにげつそりした様子で、投げやりにいった。「すみません。水をください」

悪いことをしたような気になり、おれはあわててコップに水を汲んできて彼にやった。

「おれが車に乗らない理由を聞きもしないで喋りまくるからだ」と、おれは彼の咽喉のどの動きを観察しながらいった。

「じつは、乗らないのではなく、乗れないんだ」

「はあ。色盲ですな。そんなことでしたら」

「また早合点をする。そんなのじゃない。おれはゲシュタルト崩壊を起すんだ」

「なんですか。それは」

「これは、女性ドライバーの起す事故の原因になっていることが多い。危機に直面した咄嗟の場合、判断力をなくすんだ」

「なんだ。反射神経が鈍いだけじゃないですか」

「いや。反射神経は人並みに持っている。これはもつと、心理的なものだ」

「いわる、うろがくるという奴ですか」

「その激しい奴だ。たとえば」おれはソファの上にとびあがり、凭よれに腰をおろして両腕を前につき出した。「見ろ。こうやって車を運転している。と、だしぬけに横からトラックがとび出してきた。うわっ、たいへんだ。あわててハンドルを切ろうとする。ところが、どちらへ切つていいのかわからない。たた大変だ。おどろいてブレーキを踏もうとする。いや違う。これはアクセルだ。いや違う。こつちがブレーキだ。ハンドルを。ハンドル。いったいこのハンドルというのは何の為にあるのだ。このボタンはなんだ。」

足もとにある、このおかしなものはなんだ。この棒は何という。いったいおれは、こんな動く箱の中で何をしているのか。いや。いや。おれは誰だ。名はなんという。なぜ生きてゐる」おれはクッションの上でころげ落ちた。「どこかあん」

男はあきれておれを眺め続けている。

「これがゲシュタルト崩壊だ」おれは額の汗を拭いながら彼にそういった。

「まだ車に乗ったこともないのに、どうしてそんなことになると思うんですか」と、彼は訊ねた。

「今までに何度も、そういうことがあったからだ」

そういつてから、おれは傍らの机の抽出しの中にある、とつくに完成した長篇原稿のことを思い出した。これを修文社に渡すか八木書房に渡すかで迷っているのも、おそろしく長期間にわたるゲシュタルト崩壊ではないのか。

「危機に直面したとき、おれはいつもそうなるんだ」

「あのう、それは一種の精神病では」と、男はおそろおする訊ねた。

「そうじゃない。ゲシュタルト崩壊は、むしろ頭のいい人間にしか起らない。これは情感生活の豊富な、神経の鋭敏な、つまりどちらかといえば女性的なタイプの人間に起るんだ。日常生活の上では、デリケートな、バランスのとれた精神状態を維持している人間に起るんだ」

「ははあ。そうですか」彼は疑わしげな眼で、じつとおれを見た。

おれは彼の眼を見返し、静かにいった。「あなたの考えていることをあててやろうか。『気持ちがいはかならず、自分を正気だと思つてゐる』そうだろう」

男はぎくとして身を引いた。

おれはけたけたと笑つた。「どうだ。あたつただろう」笑ひ続けた。

「お邪魔しました」彼はそそくさと立ちあがつた。「そういうご事情でしたら」あとは口の中で何かつぶやき、逃げるように部屋を出ていった。

しばらくおれは部屋でひとり、倉橋栄一がやってくるのを待ち続けた。彼はなかなか来なかつた。いつ来るかいつ来るかと思つてゐたのでは、とても仕事に手につかない。倉橋栄一という編集者は、あまりにも多忙なため、よくことわりなしに約束を反古にすることがある。来るのなら早く来てくれといつて、修文社へ電話しようかと思つた時、文芸世紀の高木邦夫から電話がかかつてきた。

「やあ。久しぶり」と、彼はいった。

「そうだね」と、おれは答えた。

「さっそくだが、あんたの出身地は大阪だね」

「そうだよ」

「先祖は大和の方の出じゃないのか」